

## 第7章 総括

### 第1節 沖縄県の戦争遺跡の特徴・課題

今回の調査に伴って、前回分布調査以後に、当センターが把握できた戦争遺跡の数を加えると、平成26年度現在で、1,076遺跡となっている。うち、開発等で消失したと思われるものは13遺跡である。今回は、この中から、現在得られている情報の中で、沖縄戦を理解するために必要な遺跡を、沖縄戦以前と沖縄戦に分け、さらに各々その種類を細分して説明してきた。総括として、その特徴と今後の調査・研究の課題をまとめることとしたい。

#### 1 沖縄戦以前の戦争遺跡

沖縄戦以前の戦争遺跡については、現在把握している数は、海底線関係施設1、中城湾海軍需品支庫1、海軍望楼・見張所5、中城湾臨時要塞3、船浮臨時要塞23、防空監視哨5、戦争に関連する施設・記念碑51、合計89遺跡である（第172～187図）。このうち、今回は残存状況や資料の熟度を考慮して、28遺跡を個別に取り上げた。いずれにせよ、沖縄戦の戦争遺跡と比べると、圧倒的に数が少ない。沖縄分遣隊や沖縄連隊区司令部などの跡地はおおよそその位置は判明しているので、今後の開発によりそれらの遺構がわずかでも残存している可能性はあるが、多く発見されることは少ないと考えられる。その意味では、今回取り上げた沖縄戦以前の戦争遺跡は、貴重であり適切な調査・保存が望まれる。

大きな特徴としては、現存している遺構がほぼコンクリート製であることが言える。それは、沖縄戦に特徴的な地下壕による陣地がまだ構築されていない時期であったためと考えられる。また今回は、構築時期より沖縄戦の遺跡として扱ったうるま市津堅島の新川グスク・クボウグスクの砲台跡や南城市ウフグスクの陣地壕跡などは、中城湾臨時要塞部隊の後身である重砲兵第7連隊によるもので、今回取り扱った中城湾臨時要塞の遺跡と当然関連があると考えられる。また、海軍望楼の後身である特設見張所や防空監視哨などは、沖縄戦時に現存し機能していると考えられるので、沖縄戦との関係についても検討すべきである。今回は、構築時期により沖縄戦時と以前で区分したが、その時間幅が考古学的に判断するためにはまりにも短く、実際には困難なところも多い。

沖縄戦以前の遺跡としては、開発が及んでいない竹富町西表島に存在する船浮臨時要塞の遺跡が残存状況が最も良好であり、今後も考古学的な調査が可能である。様々な遺跡があるが、沿岸防衛が任務とされたため、最も多い砲台跡について、通路などの関連施設も評価していくことが求められよう。その意味では、中城湾臨時要塞は現在3遺跡しか現存が確認されていないが、そのうちの平敷屋砲台跡は、戦後すぐに米軍基地に接収されたこともあり大規模な造成が及ばなかったため、砲台跡だけでなく通路なども現存している。その範囲もまとまっているので、より詳細な踏査・測量を行うことが早急に求められる。

#### 2 沖縄戦の戦争遺跡

前述してきたように、沖縄戦の戦争遺跡として、飛行場8、司令部6、陣地34、特攻艇秘匿壕9、学徒隊壕3、病院壕10、官公庁壕4、御真影奉護壕4、住民避難地18、偽陣地1、被災・破壊痕跡3、収容所1、合計101遺跡を取り上げた。また、前回の分布調査時に調査が不足していた南北大東島の戦争遺跡について、上陸戦がなかったため沖縄戦当初に最も重要視された水際陣地が良好に残存し、その内陸部の陣地跡と比較できるという点から一地域としてまとめて、南大東島10、北大東島6の合計16遺跡を取り上げた。ここでは、前述の12ジャンルごとの特徴や課題を整理したい。

##### (1) 飛行場

第32軍創設以前も、南洋方面の中継地点として、小禄、石垣島（平喜名）、南大東島に小規模な飛行場が設

定されていた。ただ、本格的な設営は、南西諸島の航空基地建設を第一の目的とした第 32 軍創設後で、最終的には 13 の飛行場が建設された。しかし、これらの飛行場の大半は周辺の区画にその名残は感じさせても、その遺跡は多くない。飛行機を格納する掩体壕は、推定幅 30 m 以上の大型の那覇市高良、通常見られる幅 20 m の読谷村座喜味、幅 15 m の石垣市大浜、幅 7.4 m と小型で桜花が格納された沖縄市白川、県内では唯一無蓋である石垣市フルスト原のものなど、事例自体は少ないが様々なタイプが残っていると評価できる。陸軍宮古島中飛行場の宮古島市上野戦闘指揮所跡は、あまり例がないものであり非常に重要なものである。現時点では、飛行場を監視する場所など構造的にはっきりしない部分もあるが、まだ地中に残されている可能性があり、今後の発掘等による確認調査が期待される。また、電波探知機壕では、石垣市平喜名（海軍石垣島北）飛行場跡のものがレンガ造りのため、沖縄戦以前の昭和 8（1933）年まで遡る可能性があり、飛行場関連の遺跡では最も古いものとなる。このように、飛行場関連の遺跡は多様なものがあり、当初航空作戦基地として注目された沖縄戦の性格を示すものである。かつて多くあった飛行場関連の遺跡も 12 か所しかないので、早急な調査や保存が望まれる。

## （2）司令部壕

第 32 軍及び海軍沖縄方面根拠地隊の各司令部壕は、米軍との上陸戦に備えて造られ実際に使用されたもしくは、その過程で移動していった指揮命令が行われた最も重要な拠点である。ただ、そのうち最大規模で最も長期に中心的な位置を占めた那覇市首里司令部壕は、その危険性より十分な調査ができない状況であり、今回も一部の現状確認を行えたのみであるがその重要性は変わらない。海軍については、いわゆる海軍壕として公開されてきた豊見城市豊見城司令部壕が有名であり重要であるが、今回は陸上自衛隊那覇駐屯地内にある地上式のコンクリート製の那覇市鏡水司令部壕にも注目した。これまで司令部壕としては周知されていなかったが、10・10 空襲によりその強度が心配されたため豊見城司令部壕に移動したことが諸資料より裏付けられる。また、今回の調査で新たに確認できた宮古島市西更竹司令部壕は、資料が少ないが独立混成第 60 旅団司令部壕と考えられるもので、素掘りの人工壕ながら全長約 220 m で、多くの画一的な部屋が直線的な通路に連結されており、良好な残存状況のためその価値は非常に貴重なものである。なお、浦添市前田高地の賀谷支隊本部とみられる壕や南北大東島の陸海軍の本部壕は、前線的な部隊の拠点であるが様々な形態の部屋が空間があるので、小規模であるが先述の司令部壕的な多様な機能も有していたことが推定できる部分もある。

## （3）陣地

沖縄戦においては、上陸戦を意識して数多くの多様な陣地が造られた。各陣地は複合的な機能・性格をもつものが多いが、今回はその中でも特徴的な部分に着目して、その性格ごとに分類した。なお、観測所も陣地の性格として考えられるが、今回典型的なものを調査することが出来なかった。

砲台 大砲が現存している那覇市当間のように構造的にも認識しやすい海軍砲台がまず注目される。また、北谷町ウカマジーの海軍砲台跡では、周辺に観測所的なコンクリート製構築物も良好に残存しており、詳細な調査が必要とされる。一方、今回はこれまでトーチカや陣地壕などと称されていても、その構造や資料から大砲を置き、砲台としての機能が主であったと考えられたものも注目した。砲身のみを突き出す開口部をもつ読谷村都屋や楚辺、うるま市津堅新川・クボウグスクや、コンクリートの砲座が明確に残る南大東村小沢洞、大砲の脚部を据える構造を持つ伊江村山グシ・宮古島市ピンフ嶺、弾薬庫の前方に露天で大砲を置く石垣市於茂登前山のものなど、多様な構造が見られる。沖縄戦においては、数多くの火砲を配備し使用されたことも大きな特徴であるが、認識しやすい高射砲陣地などはほとんど残存していない。そのため、陣地壕とされていたものなどでも、その開口部などの遺構を詳細に観察することにより、砲台として機能を有していたかどうかについても検討していくことが必要である。

トーチカ・銃眼・銃座 日本軍は、太平洋戦争での島嶼防衛において、水際防御を第一としており、海岸にトーチカや銃眼を構築した水際陣地を多く作った。沖縄戦でもその方針は反映されており、海側正面に銃眼を構築す

る南北大東島や宮古島のもの、護岸に多数の銃座が設けたうるま市川田・塩屋がその代表的なものであるが、上陸した敵を背射する恩納村ギナン原のものもある。また、宜野湾市嘉数のトーチカは上陸し内陸に迫ってきた敵を迎撃するで拠点として考えられ、中城村津覇のトーチカは海岸平野にありその性格は明確ではないが、南方に位置する陸軍沖縄東飛行場の前線を防御するためのものとも考えられる。

**陣地壕** 沖縄戦では水際陣地に加え、最終的に持久戦に持ち込むことを目的とした内陸の陣地も数多く作られ、その多くは自然洞穴を利用したものや人工壕による陣地壕、つまり地下陣地であった。これらには、大砲を据える場所や、銃眼を設けたものもあるが、今回は壕部分が特徴的なものを取り上げている。代表的なものとして、丘陵上に多様な壕を配した浦添市前田高地や宮古島市東仲宗根、山間部に小規模な壕を多数配した渡嘉敷村<sup>にしやま</sup>北山、迫撃砲の掩体を有した糸満市座波、沖縄に特徴的な石造りの墓を利用した那覇市楚辺のものなどがある。これらの壕の通路幅が基本的に1 m程度に対して、通路幅2～3 mの今帰仁村渡喜仁、部分的にコンクリート部分がありアーチ型の天井那を有する覇市ことぶき山などは、海軍による構築もしくは使用されたものとされる。

**監視所** 丘陵頂部など見晴らしが良い位置に立地し、監視窓などを有するものを監視所とした。今回、取り扱ったものでは、全方位監視が可能な南大東村海軍監視所跡、海側のみ監視窓を設けた豊見城市保栄茂、小さな窓を多方向に取りつけた糸満市与座のものがある。また、宮古島市ピンフ嶺砲台がある丘陵頂部に位置する1人用と思われる径1 mの円形トーチカも監視所的な性格が強いと思われる。先述した沖縄戦以前に造られた内務省管轄の防空監視哨や、海軍望楼・特設見張所に比べると規模が小さく、多様な構造をもっている。

**戦闘指揮所** 戦闘指揮所は一定の形態で捉えることは出来ないが、立地的には丘陵頂部や先端部に位置し、周辺の陣地の中心的な場所に位置する戦闘時の拠点と捉えられるものである。形態としては、うるま市大田のものはトーチカと壕が連結したもの、中城村161.8高地陣地では大きめの窓を有した監視所的な構造、南城市大里城跡本部壕は自然洞穴に建物が造られていたなど多様である。これらは、形態・構造では判別しにくい、その立地と各種資料で裏付けられるものを取り上げた。特に、大田の戦闘指揮所跡は、トーチカが2基連なったような構造は類例が見られない特徴的なものである。

**通信所** コンクリート製の方形構築物であるが、窓を有していたりすることからトーチカとされることが多かったものである。ただ、窓は銃眼にしては大きく、監視所にしては丘陵中腹など見通しがあまり良くない場所に造られているという特徴があるものを通信所と考えた。那覇市弁ヶ嶽のものは、史料からも明確に通信所であることが裏付けられる。立地的な特徴から、那覇市首里ハンタン山のものも取上げた。また、南大東村の秋葉神社の海軍通信所跡としたものは、石積みとコンクリートによる半地下式の方形プランの構築物で、終戦後すぐに地上に忠魂碑が建てられた。これも、窓を有するが現状では見通しが悪く、何らかの通信的な役割を有すると勘化される銅管の存在などから通信所と考えた。

#### (4) 特攻艇秘匿壕

沖縄戦の大きな特徴として、陸海軍による小型船舶による特攻作戦があり、その特攻艇を秘匿する壕が数多く設けられた。これらは、長さ約10～20 m、幅約2～4 m、高さ約2～3 mの直線的な壕が、一定の間隔を空けて数基構築されることが大きな特徴である。遺構としても特徴的な形態なので、陣地とは別に特攻艇秘匿壕という独立した分類で捉えることとした。これらの壕は幅数10 mの間隔で並ぶように造られるものが多く、宮古島市大浜では奥側に坑道で連結させたもの、同市狩俣では6本の壕が多方向に連結したものなどもある。

#### (5) 学徒隊壕

全国の学生は、1943（昭和18）年「学徒戦時動員体制確立要綱」により、様々な軍事訓練、勤労が教育されることになったが、上陸戦が行われた沖縄戦では学生の大半が学徒隊として動員された。その学徒隊が構築もしくは避難した壕を学徒隊壕とした。中でも、那覇市留魂壕は、第32軍司令部壕があった首里城の東側にい沖縄師範学校の教員・生徒により構築された人工壕で、軍構築壕に匹敵する規模をもっている。この壕の存在は



戦後も長く知られていたが、今回当センターが実施している首里城跡の発掘調査において、その全貌を確認することができた。複数の壕口から直線的に伸びる構造で坑木痕が明瞭に残り、御真影が一時保管された場所や、沖縄新報が陣中新聞を発行した新聞社壕の場所なども確認できた。現在は、首里城公園内の未開園地区にあるが、沖縄戦に特徴的な学徒隊が動員された遺跡として、その保存・活用が望まれる。

## （６）病院壕

1944（昭和19）年の10・10空襲を契機に、これまで地上にあった病院施設が地下壕に移されることになり、沖縄陸軍病院は南風原に、各師団の野戦病院壕も各地に造られた。特に、全国で戦争遺跡として最初の文化財指定となった南風原町沖縄陸軍病院壕群は非常に長大な人工壕群が構築されたもので、本格的な発掘調査が行われた初例でもあり、アンプル・薬瓶・顕微鏡など病院に特徴的な多くの遺物も確認され、非常に重要な遺跡である。この沖縄陸軍病院は、1945（昭和20）年5月後半の日本軍の南部撤退に伴って、南部地域の糸満市山城に本部、伊原に第1・3外科、糸洲に第2外科として移動していった。また、南部撤退に先立つ4月には、既に多くの負傷兵が生じたため、南城市糸数のアブチラガマに分室も設けられた。これらには、ひめゆり学徒隊で知られる女学生が看護補助要員として動員されていた。一方、各師団の野戦病院も造られ、自然洞穴を利用したものもあるが、南風原町ナゲーラ、西原町棚原などの人工壕も多い。

## （７）官公庁壕

第32軍上陸後には、各官公庁は書類の保管、職員の避難などを目的として自然洞穴の利用、壕の構築を行うようになった。書類保管の目的としては、西原町翁長の西原村役場壕が1944年6月と早い段階に造られている。一方、那覇市の真和志村役場・那覇警察署壕、那覇市シッポウジヌガマの県庁壕などは、1945年に入ってから構築した壕で、カマドなども造られているので職員等の避難も想定されたものと言える。

## （８）御真影奉護壕

1944年の10・10空襲により、県は御真影奉護のため、各地の学校に壕を造らせたりしたが、最終的には名護市大湿帯に移動させることになった。これらの壕を御真影奉護壕とし、その多くはおおよそ中央部に奉護する部屋もしくは棚を設けた人工壕である。また、八重山では支庁壕の隣、宮古島や南北大東島では軍本部壕の中もしくは周辺の壕に構築されたものもあった。

## （９）住民避難地

沖縄戦の最も特徴的なことは、日本軍の南部撤退後に軍と共に行動した多くの住民が、自然洞穴（ガマ）に避難し、兵士による追い出し・虐殺、「集団自決」などにより多くの住民被害が生んでしまったことが挙げられる。この住民避難の戦争遺跡としては、多くは自然洞穴に注目されるが、住民もしくは専門業者が掘削した防空壕、山間部に避難した建物やカマド跡なども見られる。

防空壕の多くは、10・10空襲後に各地域で避難場所として造られたものが多く、南城市前川及び八重瀬町山川などの事例がある。この以前にも掘られている事例も久米島町喜久村家や竹富町西表島金田家の壕など若干が見られる。また、名護市愛楽園の早田壕は、ハンセン（らい）病患者の療養施設である愛楽園の敷地内に、所長の命令により患者自身が構築したものである。

自然洞穴の利用としては、10・10空襲後に住民が場所取りを行ったとされるチビチリガマなどもあるが、八重瀬町新里壕など軍の陣地壕であったところをその移動後に使用した事例も多い。なお、糸満市潮平権現の壕跡は、日本軍による避難住民の追い出しが行われたが、再度戻ってくることができ、最終的には避難した全員が米軍に投降した。一方、糸満市轟の壕跡では、島田県知事らが避難し、軍による住民被害が顕著に証言された壕である。

山間部の避難地では、恩納村石川岳や石垣市名蔵白水などで建物やカマド跡が見られるが、後者は元々軍の駐

屯地であった。渡嘉敷村<sup>にしやま</sup>北山では、当初住民は集落近くの各自の防空壕に避難したが、米軍上陸後の3月28日に軍の命令により多くの住民が北山の山間部に集められ、手渡された手榴弾、または鎌などによる殺し合い、いわゆる「集団自決」が行われた。

住民避難地については、やはり体験者による証言が重要であるが、単純に避難した場所として評価するのではなく、その時系列や軍との関係などを整理し、各遺跡の形態や地形を検討していくことで、より具体的な実態が分かってくるものと考えられる。

#### (10) <sup>いつわり</sup>偽陣地・偽兵器

偽陣地・偽兵器は陣地や兵器に似せて作られたもので、擬装陣地・兵器とも言われるが、当時の史料での用語を使用した。沖縄戦でも多くの偽陣地・偽兵器が造られ、米軍が上陸後に撮影した写真には、偽砲台・偽戦車・偽飛行機などが見られる。現在、残存しているものは偽砲台跡のみで、円形の土坑を掘り込み擬砲の砲身を指し込む舟浮臨時要塞のものと、偽砲を置いた方形基壇が残る粟国村真鼻毛のものがある。

#### (11) 被災・破壊痕跡

沖縄における被災痕跡は、空襲だけでなく艦砲や上陸戦による銃撃等の痕跡が見られる。代表的なものは、激しい弾痕を残す伊江村公益質屋や名護市愛楽園の貯水タンク、弾頭が残りその銃撃方向も分かるうるま市与那城防空監視哨跡、艦砲や砲撃の痕と考えられる爆弾穴には南城市斎場御嶽、南風原町黄金森のものがある。また、米軍上陸直前及びその後には、日本軍がその進撃を食い止めるために飛行場や橋梁を破壊しており、後者にはうるま市天願橋跡や金武町億首橋跡などがある。これらの痕跡は、その構造物自体は戦争に関連しなくても、上陸戦が行われた生々しい痕跡として、その調査・保存が望まれる。

#### (12) 収容所

米軍は、慶良間諸島に上陸した1945（昭和20）年3月26日に南西諸島における日本政府の全施政権を停止し米軍政府の管理下に置くニミッツ布告を公布した。それにより、沖縄本島の上陸戦を進めながら、各地に収容所も設置していた。宜野座村内の収容所については、集団墓地で埋葬された人々の名簿があり、それが村指定文化財となっているが、収容所に関する遺構自体は確認されていない。一方、現在は米軍基地キャンプシュワブ内においては、2008（平成20）年度の名護市教育委員会による遺跡分布調査で、大浦崎収容所跡の一部を確認している。その遺構は、造成され石積みなどで設けられた平坦地がいくつか残っている。このような収容所も、その遺跡はほとんど残っていない可能性は高いが、沖縄戦の一面を表すものとして、詳細な踏査や可能であれば発掘調査なども行っていくことが早急に望まれる。

### 3 沖縄県の戦争遺跡の地域性

沖縄県の戦争遺跡の地域性は、前回分布調査時には地域ごとにまとめて調査報告を行ったため、その状況が良く把握できた。今回は、それを遺跡の種類ごとに整理することにより、沖縄戦の特徴が把握できるように努めた。が、それによりまた地域的な特徴を見えてきたこともある。この地域の設定であるが、前回分布調査時の枠組みに踏襲するが、沖縄本島周辺離島からは今回の調査でその特徴が把握できた大東諸島を独立させることとしたい。沖縄本島北部 恩納村・金武町より国頭村の間と伊江島までを北部の地域とし、145遺跡を数える。この地域には、日本軍は滑走路を3本有した伊江島飛行場を整備し、その対岸の本部半島の八重岳を複廓陣地とし、海軍部隊としては今帰仁村運天港に魚雷艇などの水上基地が置かれた。また、海岸線には西海岸を中心に銃眼などの水際陣地も配備したようである。

伊江島については飛行場を始め多くの遺跡が残っていない状況で、大砲を据えた構造が残る山グシの砲台跡は貴重な言える。海軍部隊に関連する遺跡は、今帰仁村渡喜仁の壕跡群がある。水際陣地は、恩納村にギナン原のトーチカ跡など4遺跡が良好に残存している。この地域は、中南部と比べてアハシャガマやニィヤティヤガマな

どがある伊江島を除き、地質上大規模な自然洞穴は多くない。そのため、住民避難地としては、大宜味村根路銘や国頭村伊地銅山などの防空壕が見られる共に、恩納村石川岳など「やんばる」と称される山間部にカマドや平場などの避難した痕跡がみられる。また、ハンセン病患者の大規模な避難壕である名護市愛楽園の僕宇壕跡群や、同市大湿帯の御真影奉護壕跡は、歴史的にも非常に重要な戦争遺跡である。本部町本部の旧謝花小学校の奉安殿や本部防空監視哨は、良好に残存した建造物としても評価される。

沖縄本島中部 南側を浦添市・西原町とし、北側は読谷村・うるま市までの地域とし、193 遺跡を数える。この地域は、想定及び実際の米軍上陸地となった読谷村・嘉手納町付近の西海岸を含んでおり、陸軍北（読谷）・中（嘉手納）・南（浦添市仲西）東（西原町小那覇）など4つの飛行場も整備され、各地に数多くの陣地が構築されている。

特徴的なものとしては、飛行場関連では読谷村座喜味の掩体壕跡、激戦の地であった浦添市前田高地などの陣地壕群や宜野湾市嘉数のトーチカ跡、うるま市津堅新川・クボウグスクや読谷村都屋・楚辺などの水際陣地としての砲台跡が挙げられる。全国的にも類例が少ないものとして戦闘指揮所跡があり、海軍ではうるま市大田、陸軍では中城村 161.8 高地陣地のものがある。他に、中城村津覇のトーチカは海岸より 1 km 離れた低地というあまり例のない立地だが、2 km 南にある西原飛行場との関係などその用途を検討すべきものである。沖縄市白川の桜花掩体壕跡群や北谷町ウカマジー海軍砲台跡などのように、嘉手納飛行場などの広大な米軍基地には戦争遺跡が良好に残存しているので、より詳細な調査が必要であろう。また、沖縄戦時にはほとんど使用されなかった中城湾臨時要塞の遺跡であるうるま市平敷屋・伊計砲台跡があり、前者は砲台以外にも多様な遺構が確認されており、その調査・保存が待たれる。

本地域には、石灰岩丘陵地で多くの良好な自然洞穴があり、近距離にあっても集団自決が起こった読谷村チビチリガマと多くの人々が助かった同村シムクガマや、屋敷の井戸から出入りする宜野湾市我如古のチンガーガマなどがある。また、西原町にある旧西原村役場壕跡は沖縄県で最初に発掘調査が行われた戦争遺跡で、書類保管のために構築されたことも証言だけでなく、調査でも裏付けられており重要な遺跡であろう。

沖縄本島南部 那覇市・南風原町・与那原町より以南の地域で、424 遺跡を数える。最も多くの戦争遺跡がある地域で、第 32 軍及び海軍沖縄方面根拠地隊の司令部があり、米軍上陸が想定された八重瀬町港川周辺を含み、日本軍の南部撤退後に多くの住民が避難した自然洞穴などがあつた。

第 32 軍首里司令部壕など数多くの軍事拠点があつた那覇市であるが、県都でもあり戦後の開発で多くが失われており、その一例としては那覇港周辺に多く作られた高射砲陣地跡は残っていない。それでも、航空・陸上自衛隊基地内には、砲身が残る当間海軍砲台跡や鏡水海軍司令部壕など良好な戦争遺跡が多くが残されている。また、楚辺 1 丁目の陣地壕やことぶき山の壕跡など那覇市内の緑地公園の多くには大規模な陣地壕が残されているが、安全を図るために非公開となっているところが大半である。糸満市には数多くの戦争遺跡がありまだ所在・内容が不明なところも多いが、座波迫撃砲陣地跡は良好な迫撃砲掩体が残存しており、重要な遺跡である。

米軍と激しい交戦で、首里の後方に造られた沖縄陸軍病院南風原壕群が負傷者で一杯になり、南城市糸数壕（アブチラガマ）に分室が設けられ、日本軍の南部撤退後には更に糸満市山城本部壕などに分散して移動していった。また、各師団の野戦病院壕も南風原町ナゲーラや八重瀬町富盛などに設けられているが、その実態についてはさらなる調査が必要であろう。

米軍の上陸とその後の戦闘により、首里南方に県庁・警察部壕跡（那覇市シッポウジヌガマ）や旧真和志村役場・那覇警察署壕跡（那覇市新壕）など、官公庁も地下壕に移動もしくは避難することになった。さらに、日本軍の南部撤退後は、それに伴い住民が多くの自然洞穴に避難したが、その遺跡は多数あるが改変されているものが多く、その調査・保存・公開方法についての検討の必要がある。

沖縄本島周辺離島 久米島・粟国島・慶良間諸島・伊是名島・伊平屋島を便宜的に沖縄本島周辺離島と捉えると、



69 遺跡を数える。日本軍が駐屯しなかった伊是名島・伊平屋島・粟国島には軍事施設はなく住民避難壕が大半だが、粟国島には真鼻毛の偽砲台跡がある。

慶良間諸島は、米軍が昭和 20 年 3 月 26 日と最も早くに上陸した地点であり、「集団自決」が多く行われた地域でもある。戦争遺跡としては、特攻艇部隊である陸軍海上挺進第 1・2・3 戦隊が配備され、渡嘉敷村渡嘉志久、座間味村古座間味、座間味村阿嘉・慶留間などに特攻艇秘匿壕が残存している。また、渡嘉敷島には北山の山間部に、海上挺進第 3 戦隊の本部とされた陣地壕群と、住民が避難し集団自決したとされる場所が残されている。

久米島には、1945 年 6 月 26 日に米軍が上陸し、その後に日本兵がスパイ容疑理由で住民虐殺を行った。戦争遺跡としては、10・10 空襲以前に構築された喜久村家の防空壕が良好に残存しており、沖縄戦以前に造られた上田森の海軍特設見張所跡がある。

大東諸島 現在調査が出来ない沖大東島を除いた南大東島 19、北大東島 14 の合計 33 遺跡が確認された。大東諸島は、太平洋地域の拠点として大本营により重要視され、旅団規模である約 6,000 人の陸海軍が駐屯していた。上陸戦はなかったが、空襲・艦砲は度々見られた。特に、水際陣地が各島で多く造られたが、現在把握できたのは銃眼跡が南大東島 2、北大東島 1、合計 3 遺跡であったがその特徴がよく分かり、まだ更に残存している可能性もある。その他、自然洞穴利用の具志堅洞・山下洞、御真影奉護棚が設けられた黄金山の 3 つの陸軍本部壕、これらよりも大規模な大東神社の海軍本部壕群、2 階構造の日の丸山電波探知機壕、構築者の刻銘が残る海軍監視所などが良好に残存している。

宮古諸島 宮古島・伊良部島・多良間島などで 78 遺跡を数える。宮古島には、1 師団、2 旅団の約 30,000 人の日本軍が駐屯した。上陸戦はなく、空襲・艦砲は頻繁にあったが被弾に死者は軍・住民共に少なく、住民約 3,000 人の死者の多くはマラリアによるものとされる。先述のように、宮古島にはかなりの兵力が配備され、多くの軍事施設が造られ、上陸戦がなかったためか、沖縄県内では最も良好に残存している地域でもある。トーチカ・銃眼などの水際陣地、大浜や狩俣の特攻艇秘匿壕跡、監視所的な小型で円形のトーチカも見られるピンフ嶺の砲台跡、丘陵全体に配置された東仲宗根の陣地壕跡群、独立混成第 60 旅団のものと想定される西更竹司令部壕跡などは、残存状況は非常に良好である。また、宮古島には、海軍 1、陸軍 2 の飛行場が建設され、陸軍宮古島中飛行場の戦闘指揮所跡は厚さ 1.4 m、平面が 15 m 四方の方形のコンクリート製構築物でさらに石積土塁で周囲を巡らせるなど、類例があまりない遺跡としてより詳細な調査が望まれる。

八重山諸島 石垣島・西表島を中心として、134 遺跡を数える。八重山諸島には、沖縄戦以前には西表島の舟浮臨時要塞や海軍北飛行場などが造られていた。沖縄戦時には、1 旅団や海軍部隊が配備され、約 10,000 人の日本軍が駐屯した。宮古島と同じく上陸戦はなく、空襲・艦砲が頻繁にあったが、住民約 4,000 人の死者の多くはマラリアが原因であった。先述したように、舟浮臨時要塞は戦後の開発もほとんどされなかったことから、良好に残存しているが、詳細な調査を行うには非常に広大であるが、更なる現地調査が望まれる。沖縄戦時には海軍 2、陸軍 1 の飛行場が造られ、大浜の掩体壕や平喜名の電波探知機壕などが良好に見られる。その他、海岸には宮良・川平の特攻艇秘匿壕、弾薬庫が良好に残存した於茂登前山の砲台跡、または今回は取り上げられなかったが石垣島のシイ原の陣地壕跡などの大規模な壕群もある。軍の駐屯地でもあった白水の山間部は住民の避難地でもあり、八重山支庁が構築した御真影奉護壕も残されている。

## 第 2 節 戦争遺跡の保存・活用の現状と方向性

本節では、まず第一に県内の文化財保護行政における戦争遺跡の保存について、戦争遺跡の考古学調査研究をまとめた第 3 章と、保存の現状をまとめた第 4 章を踏まえて、その現状を整理し、今後の望ましい方向性について、調査検討委員会（以下、委員会）での議論も踏まえてまとめたい。一方、活用においては、文化財保護